

野洲市総合計画審議会 福祉・生活・安全部会等  
先進地視察研修

【 結 果 報 告 書 】

1. 場所 京都市春日地区（春日デイケアセンター）

2. 日程

12：20 市役所前 出発

13：50 春日会館 到着

14：00 開会

(1) 挨拶 福祉・生活・安全部会長

(2) 講話 京都市 春日住民福祉協議会

たかせ ひろあき  
会長 高瀬 博章 様

約 1時間30分

(3) お礼 市民活動・行政運営部会長

16：00 閉会

17：30 帰庁

3. 参加者（順不同）

福祉・生活・安全部会委員（6名）、市民活動・行政運営部会委員（2名）

企画財政課長補佐、社会福祉課長補佐、企画財政課担当主査（計11名）

4. 講話の内容等

（別紙のとおり）



## 【講話の概要】

京都市 春日住民福祉協議会 視察研修事業

たかせ ひろあき  
講師 会長 高瀬 博章 様

### 1. 地域の概要

京都市には、11の行政区がある。上京区は人口84,000人であり、17の小校区で構成されている。本春日学区は、旧の春日小学校（平成7年に廃校）の校区であり、上京区では一番南東の端。河原町丸太町の交差点を擁して御所と鴨川に挟まれた場所にある。

当春日学区に限らず、京というのは町衆が作ってきたまちであるといえる。つまり、古きから行政とは対等に自治をやってきた地域である。だから今でも、行政がこういうことをやってくれと持ちかけてきても、自分たちで納得しなければ絶対に動かないし、逆に自分たちで決めたことは行政に頼らなくても自分たちで作りに上げていく。こういう文化である。

春日学区はやはり人口はどんどん減っている。また、高齢化も進んでいる。昔の話になるが、この辺りは職人さんたちが多く住んでいた長屋のまちと、近代になってからの学校や司法機関・医療機関の立地に伴って、弁護士や医師・教師が多く住んでいた地域があった。しかし、どちらもみな心は豊かで助け合って生きていた。

### 2. 住民活動のきっかけとなったできごと...

このような春日で今日の福祉協議会の活動につながるような住民活動が立ち上がるきっかけとなったできごとがあった。それは、昭和47年であるが、鴨川沿いに11階建てのマンションを建てようとする計画であった。これには住民は嘆いた。調べていくと京都市の条例施行の期限を前にした「駆け込み申請」の物件であったことがわかり、住民は一致団結して対抗した。その際の大手の事業者との交渉や役所との話し合い、そういった情報生の情報を「話題のニュース」と銘打って全区民に配布するようになった。これが今の『春日だより』の前身になった。

さらに、昭和54年のことであるが、河原町丸太町の交差点に面した喫茶店の二階で火事があり、脚の悪かった高齢のオーナーが焼死する事件があった。この事件は、ショックなことで、これをきっかけに、自治連合会の関係組織や行政が会合を持った。その結果、消防署（行政）からは「みんなを集めて防災教室をしましょう」と提案があり、さらにこれに対応するように、「それじゃあ、われわれ自治連の防災委員会は体が弱い人や高齢者に訪問指導をします」ということになった。これがきっかけで、ボランティアや行政を巻き込んで、自分たちができるさまざまな活動へと取組みが広がっていった。

### 3. 福祉防災地図について

この地図は、災害のときに、ボランティアや地域で活動する人がどこに行き、救助や支援をしたらいいか人目でわかるものが必要であると考えてつくった。時期は阪神・淡路大震災よりもっと以前であったが、結局その震災でも、こういう情報の有無が地域の被害に差をつけたと聞いている。（米原市のある地域が視察に来られて、その後同様のものを作ら

れた。)

しかし、最近「個人情報保護・・・」という制度の影響で、行政が情報を提示してくれなくなった。地域防災の観点からは大変なことであるが、地図に書いているように「ボランティアは、それぞれ色別で必要な人を識別してください」としている。これによって、 unnecessary 個人情報が配布されることもなく、ボランティアが自分で把握できるようにしている。ボランティアは情報を自分で稼ぐしそれを他人に見せることはない。

地図は2年に1回更新している。図上に「ガレージ」となっている世帯が幾つかあるが、これは、更新の際に掲載拒否された家である。ただ、ボランティアはそこにも対応している。この地図は、社協に対して配布して災害物資の配布にも役立ててもらおうようにしている。

#### 4.地域防災について

福祉と安全は、今日切っても切れないものとなっていると考えている。その点、この会議（野洲市の総合計画審議会）は福祉と安全を一緒に考えておられるのでいいことである。

災害時、最も大切なことは、自主防災の力。つまり、被災から3日間自分たちで何ができるかである。非常時、行政は受入れ体制の整備と二次災害やインフラ復旧への対応だけで飽和し、到底各々の地域や市民の生活にまでは手が廻らないものであるからである。それと社協の働きは大切。自主防災活動においては地域の社協との連携は欠かせない。日頃から一体的になっておくべきである。

春日学区の各自治会とも、防災に対する取組みは活発である。ヘルメットや防災袋を自治会で購入し、全住民が備えている地区もある。

（行政からの補助は？）「そんなもので買ったら、みんな大事にしないでしょ？ ただ、炊き出し用の釜を買った。これは宝くじの補助を募集しますという市の広報の記事を偶然にも見つけてすぐ手を上げたら当たって幸いだった。補助金は何かないか、常に目を光らせていないとダメだ。」

#### 5.福祉・防災等に関わる多くの実践活動の紹介

（PowerPointにより、写真を見せながらの説明であった）

「文化講座」を年間3回開催している。小学校の体育館を利用して、今年は、歌舞伎を鑑賞した。この文化講座について重要視しているのは、子どもと老人とのふれあいデーであるという視点である。この事業には、立命館大のゼミ生など多くのボランティアを参加してもらっている。

地域には一人暮らしの世帯が多くある。そこで考えたことがいくつかあるが、まず、一人暮らし同士が緊急時に呼び出しあうように回線を設置している世帯がある。

高齢者のミニサロンもこのデイケアセンターで実施している。介護は予防の時代である。特別に専門的な資格がないボランティアであってもできる。それに、簡単な健康チェックを近くの看護学生のボランティアに頼んでやってもらっている。

「サロン」というものは、どこでもできるものと考えている。例えば4人の一人暮らし老人がいたら、誰かの家に寄ってもらっているケースもあるし、喫茶店へ出てもいい。それをコ

ーディネートするボランティアと少しの費用があればそれでサロンになる。

サロンでは色々なテーマを提供している。音楽療法であるとか園芸療法のサロンもやっている。この場合、「音楽療養」の場合は十字屋楽器店からのボランティア、園芸療法の場合は造形美術大学のボランティアを受けている。

子どもや若い女性用と考えられている防犯ベルを「福祉ベル」として希望する高齢者に配っており、これは有効。しんどくなったらどこでも押せばいい。そしたら誰か立ち止まってくれる。

子ども達との交流も双方のために大事だと考えている。夕食を高齢者と食べる日を設けている。70人くらいが集まって賑やかに食べる。

介護支援に関わって、「サービス調整チーム会議」というものを開催している。行政の関係者も一部入っている。この会議では、ミニサロン等の介護日程を一人ずつ作っている。介護保険サービスとの調整も大切であるので、「連絡ノート」というものを関係世帯に置いて、ボランティアとサービス事業者との有機的な連携も図っている。

防災訓練については、学区内の国や府の公共機関も一員として巻き込んでやっている。市や学区の関与する施設では不十分であるので、例えば府立高校や法務局についても、場所の開放等で積極的に協力してもらっている。図上訓練についても積極的に取り組んでもらっている。

## 6. 「住民福祉協議会」と「学区自治連合会」

一般的な考え方では、「自治連合会」というのは、自治会の役員が集まりであって、「住民福祉協議会」(学区社協)というのは、各種団体の集合体であり、それぞれが別々になっていると思う。しかし、春日学区の場合は、各自治会の代表(地縁組織の代表)と各種団体の代表(目的組織の代表)が同じラインで会議の席について、学区の評議員を選出したりする。

自治会長は毎年代わっていったりするが、各種団体の長はそうではなく、この点でまず非常に活発な原動力となってくれる。自治会の活動は本来住民の安全や福祉の向上を目指すものであるし、各種団体の活動の最終の対象は住民であるのだから、両者の活動を一体化して、同じ機関の中で稼働させるほうが有効である。

活動資金については、自治連合会から交付されてくる資金と、市社協から流れてくる資金を一本化している。その他多くの寄付もあるし、ボランティアの力も大きい。行政とのかわりもバラバラではない。これだけ活動していたら、逆に行政も放っておかないものである。そもそも行政は、各所で住民に何かをやってほしがっているが、制度や公平性を確立する必要があるために、なかなか言い出せないでいるものである。

## 7. その他質問・意見交換の概要

私の地元で懸案と考えていることに、老人クラブの入会一つ取ってみても市民の理解が得られない。どうしたらこのように区民の賛同が得られるようになっているのか。

地道に足を運ぶことしかないと思う。

講師の強いリーダーシップ以外の力として、組織としてコーディネートする体制(=事務局)はあるのか。

事務局はない。基本的には月1回の評議委員会で議論して決めており、各種団体の長は、その点本当に力強い頼りである。「春日だより」も月1回、各種団体が集まって記事を持ち寄りすぐできる。

自分は110世帯の自治会長をしており、何か参考にして取組みたいと考えているが、課題も多い。

100世帯ほどの1か町では取り組めることは限られてくるのではないかと。しかし、学区でまとめて広がっていくことで、ボランティアなどの「人材」も必ず確保できるようになる。各種団体を学区ごとで一元化されていることに感銘した。野洲市の現状では自分がやっている活動の範囲は良くわかっているが、他の団体でどういうことがされているのか良く見えない。それをコーディネートするのが、学区自治会の役割であると感じた。

学生のボランティア等を大いに取り込んで実践されている。学生への指導を図っていく上で参考になった。

この廃校の拠点となっている建物は市から無償提供を受けているものか。

形としてはそのとおり。ありがたく貸していただいている。当然と思わない、そういう気持ちが大切であると考えている。なお、区の公会堂はあるが、地区の公民館は京都にはほとんどない。もともと「自分たちの」小学校を中心に自治活動があったからである。

## 8. 研修所感

福祉・防災等活動における、多くのボランティアとのコーディネートが大変進んでいた。

決して恵まれているとは言えない施設や資金的な環境の中で、多様な地域活動に取り組んでおられる状況を学習することができた。話を聞き進む中で、住民自治(協働・地域福祉)というものが、すでに文化として深く根付いていると感じた。

研修冒頭、「町衆が創ってきたまち」、「行政とは対等である」という言葉をおっしゃったが、その認識の土壌にあるものは、やはり自らのまち(市)を愛する想いと地域を誇り思う気持ちであると感じた。

住民福祉協議会の組織については、具体的な問題として大変参考になると考えられる。社協における今後の地域福祉への取組みの推進に当たっては、学区自治連合会の活動のあり方と結び付けて検討していくことが必須であると考えられる。「地縁活動組織(自治会)」と「目的別組織(市民活動団体)」の関係整理についての一つの先進事例としても参考になるものであった。

講師の言葉にもあったが、地域防災と地域福祉・自治会活動・市民活動についての連携についても十分に強化するべきであると感じた。